DYNAMIS, 1 (1997), *15–26*

19世紀におけるドイツ語統語論の変遷について[1]
ー統語論から見た DUDEN 文法前史ー

湯浅　博章

0．はじめに

今日の実用的なドイツ語文法の標準的なものとされる DUDEN 文法は，その起源を辿ると 19 世紀の Bauer/Duden (1876) という形で出版された文法書に遡る。この 19 世紀という時代は，ドイツにおいては，歴史比較文法や一般文法，伝統文法や論理的・哲学的文法といった様々な言語学的立場から多くの文法書が書かれた時代であった。また，この時代には，歴史比較文法に代表されるような学問としての言語学と，伝統文法に見られるような実用的な文法記述を目指した学校文法との対立も見られた。こうした中で，Bauer/Duden の文法書はそれまでの様々な文法書の成果をまとめる形で書かれた (Forsgren, S.23)。しかし，この時代の種々の文法書にどのような特徴があり，それらをもとにどのようにしてこの文法書がまとめられていったのかについてはあまり明確にはなっていない。この小論では，主に実用的な文法を中心に扱いながら，統語論を手掛かりに Bauer/Duden に至るまでのこの時代の変遷を辿り，その特徴づけを試みる。

1．歴史比較文法と統語論

この小論では実用的な文法を中心に扱うが，19 世紀において J.Grimm に代表される歴史比較文法が言語学史上果たした役割は非常に大きいと考えられるので，まず初めに歴史比較文法における統語論に触れておきたい。

J. グリムは 4 巻にわたる大部の文法書 (1814) を残しているが，統語論に充てられているのは 1 巻であり，文構造の分析についてはわずか数十ページしか記述されていない。グリムの文法書編纂の姿勢から考えれば当然と言えるが，この統語論では，品詞ごとにその文中での振る舞いについて古典的な文献からの豊富な実例を列挙することに重点が置かれ，その解説は重視されていない。また，文構造についての記述

[1] この小論は，1995 年 12 月 2 日に日本独文学会京都支部会の秋季研究発表会において口頭発表した内容に加筆・修正し，論文の形にまとめたものである。

を見ると，文とは人間の思考の表現であり，思考 (Gedanke) は対象 (Gegenstand) と想念 (Vorstellung) を結びつけることであるから，文はこれらに対応する主語と述語，そして両者を結びつける連結詞 (Copula) とから成ると述べている (IV: 1)。そして，主語 (Subjekt) に成るのは Nomen であり，述語 (Prädikat) には Verbum と Nomen が，連結詞には Verbum が成るとして，この両者を中心とする品詞ごとの記述を行っている (Vgl. ebd.)。こうした記述は，中世からの論理学を前提としたそれまでの伝統的な文法と同じものである。しかし，グリム自身はこうした論理学的な文法に批判的であった (Vgl. I: VI)。このことからも分かるように，グリムを初めとする歴史比較文法においては統語論はそれほど重要なものとは考えられていなかったようである。それ故，統語論のみについて言えば，歴史比較文法はあまり大きな役割は果たさなかったと考えられる。

2．品詞に基づく統語論

19 世紀の実用的な文法記述の特徴には，それが品詞 (Wortarten) に基づくものなのか，文肢 (Satzglieder) に基づくものなのかということが挙げられる。この違いは単なる記述単位の違いに留まらず，文構造の捉え方・言語観の違いを反映している。以下では，この時代の統語論をこの点から捉え直してその特徴づけを試みるが，この章では品詞を基準にして統語論が構成されている文法の特徴を探ることにする。

2.1. J.Ch.Adelung

まず初めに，時代は少し遡るが，18 世紀末の J.Ch.Adelung を取り上げる。それは，アーデルングがそれまでに書かれた種々の文法記述を総合する形で文法書を著し，19 世紀に至るまで直接・間接問わず大きな影響を及ぼしたと考えられるからである。[2]

アーデルングは，中世の論理学以来の伝統に従って，人間に普遍的と思われる論理構造を言語の前提とし，文は思考の表現であると考えている。そのため，論理構造に合うように文構造を捉えようとするので，以下のような基本的認識に基づいて文構造を分析している。

[2] J.Ch. アーデルングの統語論については，拙論 (1993) で詳細に扱った。そちらを参照戴きたい。

(1) 文は自立的な概念とそれを説明するための非自立的な概念を結びつけることで成立し，文の必須要素には自立的な概念を表し主語となる名詞，非自立的な概念を表す述語，両者を結びつける連結詞が挙げられる (1782, I: 273, II: 566ff.)。

(2) 文中では主語となる名詞が中心であり，述語は名詞の概念を説明するための規定成分である (ebd.)。

また，文構造については，

(3)「支配する語が支配される語に先行する」(1782, II: 505ff.) から，文の中心である主語が述語に先行して述語を支配し，述語となる定動詞が目的語や副詞成分に先行してそれらを支配する (ebd.)

として，語順に基づく支配関係を想定している。しかし，容易に想像できるように，現実の言語の姿はアーデルングの考察と矛盾することも多い。

さらに複合文についても，アーデルングは語順に基づく論理関係から分析している。アーデルングは複合文を先行文 (Vordersatz) と後続文 (Nachsatz) とに分け，先行文は後続文の根拠を表すとしている (1782, II: 577)。しかし，実際には (1b) のように副文が後続することも多く，ここにも矛盾が生じている。

(1) a. Weil die Anstalten so schön getroffen waren, so gingen sie gut von Staaten.

b. Die Anstalten gingen gut von Staaten, weil sie so schön getroffen waren.　(後続した「先行文」)

また，アーデルングは複合文は文法的には資格の同じ二つの文が接続詞によって結び付けられたものと考えている (1782, II: 476f.) が，当然ながらこれは副文内の定動詞後置という事実と矛盾することになる。

このように，人間の論理構造をそのまま文構造に当てはめようとするのがアーデルングの特徴であった。このため，多くの場合に矛盾が生じ，今日から見ると統語論としては問題の多いものとなってしまっている。

2.2. H.Bauer

次に，19 世紀前半の代表的な文法家であった H.Bauer の統語論を見てみよう。バウアーは，同時代の Becker や Herling, Grotefend, Bernhardi, Schmitthenner らの文法を批判的に検討しながら自らの文法を記述している。先に見たアーデルングほど明確ではないが，バウアーの場合にもやはり人間の論理構造が言語の前提となっているようである。そして，文は人間の思考の表現であるとして，文の構成要素には思考の出発点である主語と，主語によって叙述される概念である述語，そして両者を結びつける連結詞を必須要素として挙げている (Vgl. IV: 1ff., 421f.)。けれども，アーデルングのように論理構造をそのまま文構造に当てはめるのではなく，バウアーは文を表現面と内容面に分け，文の文法的関係と論理的関係を考察している。これは，後に見るように文肢に基づく統語論にも見られることで，この時代には一般的になっていた方法と考えられる。ただ，バウアーの場合には，文法的関係と論理的関係は必ずしも一致する必要はないとされ，論理構造を優先的に見ていることを窺わせる (Vgl. IV: 531f.)。

さらに，複合文の構造についても，アーデルングと同じように先行文（Vordersatz）と後続文（Nachsatz）に分類して考察することが提唱されている。それは，従属関係の指標となる接続詞が省略された場合も多く，他の多くの文法家のような接続詞の意味による分類は有益ではないと考えられているからである (IV: 531f.)。バウアーによれば，先行文は後続文に対して常に従属的な要素 (つまり，副文) であり，後続文は論理的にも文法的にも主文である (ebd.)。そうすると，バウアーの言う主文と副文の結合は，統語的な機能に基づくものというよりは，アーデルングに見られたような論理関係に基づくものであり，論理構造のパターンが文構造に当てはめられていると考えられる。そのため，アーデルングに見られたのと同様の矛盾が生じてくることになる。

(2) a. <u>Wenn mein Bruder heut kommt</u>, so besuchen wir dich.

b. Ich will zu dir kommen, <u>weil er dir Vergnügen macht</u>.

(= „Vordersatz“)　　(IV: 536)

上記の (2b) のような後続した副文は，バウアーによればすべて「倒置」だと考えら

れている。また，このように論理関係を重視しているので，(3) のような場合には，倒置された「先行文」とされる副文は文法的には被支配的なものではあるが論理的には支配的なもののはずであり，(3') とされるべきであるとまで言われている。

(3) Wir blieben zu Hause, weil es zu kalt war.
(倒置された「先行文」)
(3') Wir blieben zu Hause, (denn) es war zu kalt. (IV: 538)

以上のように，アーデルングとバウアーのいずれの場合も，論理構造を文構造の分析に当てはめようとするために矛盾点を生じさせることになっている。品詞に基づく統語論は，このように中世以来の論理学を踏まえていることが多く，それが言語現象そのものの観察に基づいて統語論を記述することを阻んでいたように思われる。

3．文肢に基づく統語論

3.1. K.F.Becker

次にこの章では，文肢に基づいた統語論の特徴を探ることにしたい。まず，ここではドイツにおける「文肢論」(Satzgliedlehre) の代表的人物とされる K.F.Becker の統語論[3] を取り上げることにする (Vgl. Glinz)。ベッカーは W.v. フンボルトの言語哲学に基づいて，言語を有機体 (Organismus) として捉え，言語は諸要素の関係によって成立する「構造」である[4] と捉えていた (Vgl. 1841: 18)。また，ベッカーは論理構造を言語の前提とすることを否定し，人間の思考 (Gedanke) と言語は同時に成立するものであり，不可分のものであると考えている (Vgl. ebd.: 19)。

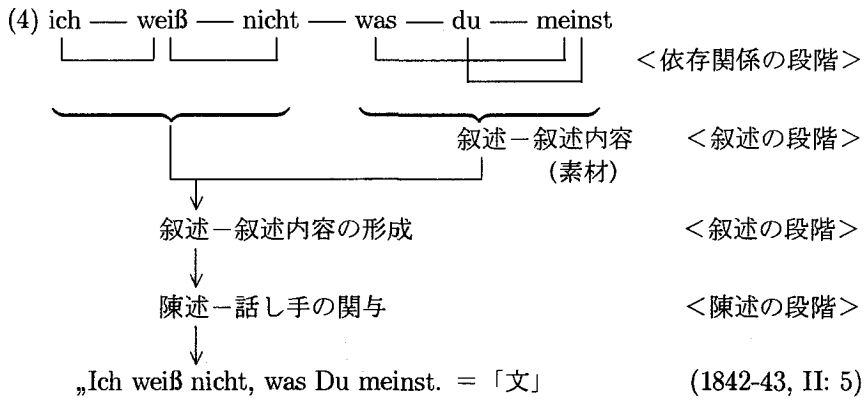
さらにベッカーによれば，文の必須要素は主語 (Subjekt) と述語 (Prädikat) であり，文の構成はこの主語と述語を中心とした「述語的」・「付加語的」・「目的語的」という三種の「文関係 (Satzverhältniß)」から成立すると考えられている (1842-43, II: 7)。文中に現れる諸要素は，このうちのどれかの要素となることで文肢として

[3]K.F. ベッカーの統語論については，拙論 (1993), (1995) で詳細に扱った。そちらを参照戴きたい。
[4]田中 (1993) では，有機体概念を言語研究・文法記述に応用した初期の人物としてベッカーに言及されているが，そこで言われているのは生物学的な意味であり，有機体概念のもう一方の側面である。この生物学的な意味での有機体概念は，むしろグリムに始まる歴史比較文法に受け継がれていった。

文中での役割を担うことになる (ebd.)。つまり，ベッカーは文肢概念を用いることで，文の構造を形態と意味だけではなく，要素と要素との関係に託される機能として捉えていたのである。

さて，ベッカーの統語論に特徴的なのは,「述語的文関係」に複数の機能を認めている点である。この関係はまず述語を中心とした依存関係と捉えられるが，主語は話し手が述語を用いて叙述を行う際の焦点とも言えるものでもある (Vgl. 1841: 16ff., 231)。さらにこの関係は，他の２つの関係が「概念」(Begriff) しか表せないのに対して,「思考」(Gedanke) を表すとされる。ベッカーによれば，この Gedanke とは Aussage と等価であり，単なる叙述内容 (=das Gedachte) ではなく，話し手による表現を通じて初めて成立するものである。このように，ベッカーは文構造の中に言わば依存関係・叙述・陳述の三層構造を設定している (Vgl. ebd.: 183f., 1842-43, II: 59f.)。

複合文の構造についても，ベッカーはこの三層構造に照らして分析している。ベッカーによれば，副文は「何らかの文関係の成分 (Glied) として，他の概念との文法的な関係の中に存在する」ものであり，副文も文全体の構造の中では一つの文肢に過ぎないとされ，副文を文中での働きから主語文，付加語文，目的語文に分類している (1841: 470)。これは,「主文は話し手の思考 (Gedanke) を表すが，副文はそもそも一つの概念 (Begriff) しか表さない」(ebd.) からであり，副文は叙述の段階までのもので，陳述のための素材である叙述内容を構成するに過ぎないと考えられているからである。この関係は，(4) のように図示できるであろう。



3.2. J.C.A.Heyse

次に，ベッカーのものと並んで学校文法としては広く浸透し，19 世紀末頃まで高く評価されていた J.C.A.Heyse の統語論を取り上げる。一般的には，ハイゼはベッカーと対立していた人物と考えられている (Vgl. Glinz) が，実際にはベッカーの記述を引用し，それに基づいて考察を行っている部分も多く見られる。

まず，ハイゼも言語は有機的なものと捉え，個々の語の特徴は文中での文肢としての役割から明らかになると考えている (I: 120f., 276f.)。そして「すべての文が論理的な Urtheil を表すわけではない」として，人間の論理構造を文構造の前提とはしていない。また，文の形成は実際の「発言」(Rede) の中に置かれることによって完成すると述べ，ベッカーと同じく文が実現されるためには話し手の関与が必要であると考えていた (II:1f.)。文の必須要素には「述語によって述べられる対象」を表す主語と「対象について述べる」述語が挙げられ，連結詞（Copula）は述語が名詞や形容詞によって表される場合にのみ現れるものと考えられている (ebd.)。この中では，述語となる動詞が文の本質的な要素であり，文は動詞を中心とする依存関係から構成されるものと見做されている。さらに，ベッカーほど明確には述べられていないが，主語と述語による「述語的関係」は相互依存的に捉えられている (Vgl. II: 16f.)。

複合文については,「主文と副文を結びつける従属関係は ··· 論理的関係を文法的に表したもの」であり，副文は主文の「規定成分」(Bestimmung od. Ergänzung) として表されるという (II: 630)。従って，機能的に副文は主文の文肢として捉えられている。しかし，副文が文肢として捉えられる根拠や主文と副文の機能の違いについては言及されていない。これに対しては,「ドイツ語は主文と副文で語順を変える」(II: 539) ということと，副文は「文法的には独立していないもの」(ebd.: 585) と述べているだけである。また，ハイゼは主文と副文の意味関係を重視しているので,「ある文の内容が，他方の文の内容に対する規定成分となっている場合に従属関係と考えられる」として，以下のような場合は fehlerhaft だと考えられている (ebd.: 632)。

(5) a. Er beging mehre Verbrechen, <u>weshalb er ins Gefängniß geworfen wurde</u>.　(→論理的には従属文ではない)

↓

b. Er wurde ins Gefängniß geworfen, weil er mehre Verbrechen begangen hatte.　(= (5a) に対するより良い表現)

以上のように，文肢に基づく統語論は中世以来の論理学の影響を脱け出し，言語事実の中に説明原理を求めようとした。そして，文肢という概念を用いることによって，文構造は諸要素の関係によって形成される階層的なものであることを示そうとした。この点では，文肢に基づく統語論の功績は大きいと言えよう。

4．F.Bauer と DUDEN 文法

最後に，今日の DUDEN 文法の基となった F.Bauer (Bauer/Duden) の統語論を見ておきたい。F.Bauer は，アーデルングが文法書を著したときと同じように，先人達の成果をまとめることを目的としていた (Forsgren, S.23)。バウアーは音声や語構成の記述に際してはグリムに依拠していたが，統語論の面では「ベッカーの方法論が浸透した」としてベッカーに基づいている (1868: ivf., Forsgren, S.62)。そして，言語有機体観に従って，文は思考の肉体であり，この肉体の四肢としての個々の語は文肢と捉えられるとしている (1882: 130)[5]。

文の必須の構成要素には，述語によって述べられる主語と叙述を行う述語が挙げられ，述語が名詞や形容詞で表される場合だけ sein や werden といった形式的動詞としての連結詞が認められている (ebd.)。また，述語は文中の中心要素と考えられているが，バウアーによれば，述語となる定動詞は語尾によって常に主語を志向するものでもあるので，述語は「意味的には主語を従えるもの」であり，「文法的には主語に従属するもの」と捉えられている (ebd.: 133)。この意味的な側面についての指摘は，述語の意味に託された，今日で言う結合価の働きによって主語が要求されるということだと考えられる。しかし，文法的な特徴として挙げられている主述関係の働きが，ベッカーやハイゼの場合のような文の階層的な構造に基づく機能として捉えられているかどうかは不明である。

複合文の構造についての考察では，バウアーは「上位文」(Obersatz) と「下位文」

[5]F. バウアー／K. ドゥーデンの統語論については，Forsgren による記述を参照した。

(Untersatz) という用語を用いている。そして，副文を意味する下位文は主文を意味する上位文に依存するものであり，下位文は上位文の一文肢として理解されている (ebd.: 155)。しかし，ハイゼの場合と同じく，副文が文肢として捉えられる根拠や主文と副文の機能の違いについては明確な言及は見られない。ただ，以下のような „Satzmuster“ を見る限り，主文と副文の機能の違いについては意識されていたように思われる。

(6) a. Catilina glaubte,
　　er ... unterdrücken,
　　sobald Cicero ... sei.

(Catilina glaubte, er würde den röm. Staat leicht unterdrücken, sobald Cicero aus dem Wege geräumt sei.)

b. Daß es gut sei,
　　eine ... zu zügeln,
　　wird ... geläugnet.

(Daß es gut sei, eine Leidenshcaft zu zügeln, wird von Niemand geläugnet.) (ebd.: 150f.)

このように，F. バウアーは基本的にはベッカーの文肢による統語論を踏襲している。そして，やはり文中の諸要素の果たす機能に基づいて統語論を記述している。けれども，ベッカーの場合に見られた文構造の階層に関する記述は見られない。これは，先に見たハイゼの場合も同様であった。これは，ベッカーの記述が抽象的で，文構造に設定された三層構造の存在を具体的に立証することができていないことによるものと考えられる。ベッカーの議論は抽象的な面が多く，そのためにこの時代には「思弁的である」と批判されていた状況を考慮すると，ハイゼやバウアーがあえて言及を避け，簡略的にベッカーの成果を取り入れていたものと考えられる。

5．終わりに

以上の考察から，最後に幾つかのことを指摘しておきたい。一般的な言語研究史的に見れば，グリムを初めとする歴史比較文法の業績は大きなものであるが，統語

論の立場から見れば歴史比較文法の役割は大きなものとは言えない。統語論の発展に貢献したのは，それとは反対の立場にあった実用的な文法であった。この実用的な文法の中には品詞に基づく統語論も含まれるが，これは中世以来の論理学の影響が強く，言語事実に即したものとは言えなかった。それに代わるものとして浸透していったのは，ベッカーに始まる文肢に基づく統語論であった。このことは，ベッカーに対立していたと思われるハイゼにも，バウアー／ドゥーデンにも文肢に基づく統語論が取り入れられていったことからも分かる。

このように文肢に基づく統語論が広まっていった理由は，文を構造として捉え，諸要素の果たす機能が考察されていたことによると言える。確かに，先にも触れたように，この時代におけるこうした機能についての考察は不十分なものであり，その内実も明確なものではない。けれども，この時代に本稿で見たような統語論の変遷・発展があったからこそ，後に Paul や Erdmann, Behaghel, Blatz, Drach といった統語論の出現が可能になったと位置付けることができるのではないであろうか。19 世紀末以降現代に至るまでの時代の統語論との関連において本稿で考察した統語論の位置付けを試みることは，稿を改めて論じることにしたい。

[Literatur]

Adelung, J.Ch.(1781): *Deutsche Sprachlehre.* Berlin. (Nachdruck: Georg Olms Verlag, Hildesheim, 1977.)

Adelung, J.Ch.(1782): *Umständliches Lehrgebäude der Deutschen Sprache.* I/II, Leipzig. (Nachdruck: Georg Olms Verlag, Hildesheim, 1971.)

Bauer, H. (1827-33): *Vollständige Grammatik der neuhochdeutschen Sprache.* 5 Bände. Berlin, Reimer. (Nachdruck: Walther de Gruyter, 1967.)

Becker, K.F.(1841): *Organism der Sprache.* Frankfurt a.M. (2.Aufl.) (Nachdruck: Georg Olms Verlag, Hildesheim, 1970.)

Becker, K.F. (1842-43): *Ausführliche deutsche Grammatik als Kommentar der Schulgrammatik.* Frankfurt a.M. (2.Aufl.) (Hildesheim, 1969.)

Forsgren, K.– Å.(1992): *Satz, Satzarten, Satzglieder.* Nodus Publikationen, Münster.

Gallmann, P./ Sitta, H.(1992): Satzglieder in der wissenschaftlichen Diskussion und in Resultatsgrammatiken. In: *Zeitschrift für germanistische Linguistik,* 20.2.

Glinz, H.(1947): *Geschichte und Kritik der Lehre von den Satzgliedern in der deutschen Grammatik.* A.Francke AG. Verlag, Bern.

Grimm, J. (1814-37): *Deutsche Grammatik.* 4 Bände. Göttingen, Dieterich. (Nachdruck: Georg Olms Verlag, Hildesheim, 1967.)

Helbig, G. (1981): *Geschichte der neueren Sprachwissenschaft.* 5. Aufl. Westdeutscher Verlag, Opladen.

Heyse, J.Ch.A. (1838-49): *Theoretisch-praktische deutsche Grammatik oder Lehrbuch der deutschen Sprache.* I/II (5.Aufl.) (Nachdruck: Georg Olms Verlag, Hildesheim, 1972.)

Naumann, B. (1986): *Grammatik der deutschen Sprache zwischen 1781 und 1856. Die Kategorien der deutschen Grammatik in der Tradition von Johann Werner Meiner und Johann Christoph Adelung.* Erich Schmidt Verlag, Berlin.

Schmidt, H. (1986): *Die lebendige Sprache.— Zur Entstehung des Organismuskonzepts.* Berlin, Akademie-Verlag.

田中克彦 (1993): 言語学とは何か (岩波書店, 岩波新書 303)

Vesper, W. (1980): *Deutsche Schulgrammatik im 19. Jahrhundert. Zur Begründung einer historisch-kritischen Sprachdidaktik.* Tübingen, Niemeyer.

湯浅博章 (1993): 「品詞論」から「文肢論」への歴史的展開 — 文構造の分析に見るパラダイム転換 — (Seminarium 第 15 号, 大阪市立大学ドイツ文学会)

湯浅博章 (1995): 文肢論の「普遍性」と「可能性」 — Becker, Brinkmann, 渡辺実における構文論をめぐって — (「ドイツ文学論攷　第 37 号」, 阪神ドイツ文学会)

Zusammenfassung

Zum Wandel der deutschen Syntax im 19. Jahrhundert

Hiroaki YUASA

Im 19. Jahrhundert erschienen eine ganze Reihe Grammatiken der deutschen Sprache, darunter auch der „Vorläufer“ der heutigen DUDEN-Grammatik (F.Bauer/K.Duden (1876)). Die vorliegende kleine Arbeit nimmt sich zur Aufgabe, diese verschiedenen Grammatiken, insbesondere Gebrauchsgrammatiken, zu beobachten und die „Vorgeschichte“ bis hin zu Bauer/Duden zu charakterisieren.

In Bauer/Duden wird eine Satzlehre mit Satzgliedern (Satzgliedlehre) vorausgesetzt, die bis auf die Grammatik von K. F. Becker zurückgeht. In dieser Zeit wird also keine Satzlehre mit Wortarten (Wortartlehre), sondern eine Satzgliedlehre vertreten. Der Grund dafür scheint mir darin zu liegen, daß die Wortartlehre, z.B. von J.Ch.Adelung oder H.Bauer, eine seit dem Mittelalter geläufige Logik voraussetzt und die logische Struktur auf die Satzanalyse anwendet, hingegen die Satzgliedlehre die Sprache als Struktur betrachtet und die Funktionen der Satzkonstituenten klarzumachen versucht.